

本学の子育て支援活動と学生教育との接続

森本美佐・小川純子・高橋千香子

奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

An Attempt to Link University Student Education and Child Care Support Activities in our College

Misa Morimoto・Sumiko Ogawa・Chikako Takahashi

Naragakuen University Narabunka Women's College

現在の多くの若者は、コミュニケーション能力が低く、乳幼児やその親世代と触れ合う体験が不足していることから、保育現場で対応できない場面がたびたび起こる。そこで本学では、「音楽の基礎」「子どもの保健」の授業と連携を取り、1年次早期から本学の子育て広場（「つどいの広場」「ちびっこ広場」）への参加を経験させている。

本研究は、子育て広場への早期参加の効果と課題を明らかにすることを目的とし、「子どもの保健」の授業で「つどいの広場」「ちびっこ広場」に参加した学生へのアンケートおよびレポート結果をもとに学生の学びと課題を検討した。学生にとって、早期に広場体験を行うことは、広場が実践的学びの場となり、子ども理解が深まり、親子との関わり方など自らの課題を見出すことができていた。また、参加回数を重ねるごとの学びはあったが、継続的な自主参加ができていなかったという課題も見い出された。継続的に学生の自主参加を促していく取り組み方法を検討することや、広場体験が授業期間のみで終わるのではなく、日常的に2年ないし3年を通して授業と広場の往還ができるよう工夫していくことが必要である。

キーワード：子育て支援活動、学生教育、授業連携

1. はじめに

現在の学生たちは、少子化や核家族化など地域社会の希薄化が問題となったころに生まれ育っている。そのため、近隣の小さな子どもと触れ合う体験や、同年齢以外の人と接する機会も少ない。また、ゲーム・ネット世代、内向き志向と言われ、1日中誰とも話すことなく、ラインやメールで会話を楽しめる。本学の学生たちも例外ではなく、「小さな子どもは可愛い」「子どもが好き」といった理由で保育者を目指すものの、コミュニケーション能力が低く、保育実習では子どもとの交流や教員と十分にコミュニケー

ションが取れない学生が少なくない。そのことが、就職後の早期離職の原因の一つにもなっていると考えられる。

一方大学では、地域との協働は不可欠となり、大学の資源を活用しながら地域子育て支援対策を強化していくことが求められている。保育者養成課程を有している本学でも、奈良市の委託を受けて、親子が集う広場「つどいの広場ぶんたん」を平日に開設している。通常は特にプログラムは用意せず、親子が安心して過ごせる空間を保障している。1日に1回つどいの時間として、絵本の読み聞かせや歌などを行っている。また、月に2回、「つどいの広場」のイベントとして位置づけられた「ちびっこ広場」も開催している。

本学では、平成23年度から「ちびっこ広場」において2回生で受講するゼミの成果発表を行ってきた。授業で習得してきたオペレッタや絵本の読み聞かせなどの演示により、保育実践能力を高めることにつなげることができていたが、一部の学生に限られてきた。また、保育実習がすべて終わった後の発表となり実習には生かせていなかった。そこで、平成26年度から、早期から乳幼児の親子と関わり、実践的学びの場を持てるよう、授業との連携を考え1年次より「つどいの広場」「ちびっこ広場」に参加することとした。(以後、2つの広場を区別しない場合は、「広場」または「子育て広場」と表記する。)

本稿では、「子どもの保健」の授業で「子育て広場」に参加した学生へのアンケートおよびレポート結果をもとに、学生の学びと課題を検討し、学内の子育て支援活動を学生教育の観点から考察する。

2. 子育て支援活動と授業との連携

前述のように平成26年度から、「音楽の基礎」(1年次通年)と「子どもの保健」(1年次通年、長期履修3年コースは2年次通年)において、全履修学生が「つどいの広場」または「ちびっこ広場」に参加している。「つどいの広場」の参加者は2歳児までが多く、「ちびっこ広場」では、2～3歳児が多い。

2.1 「音楽の基礎」

子育て広場に参加する学生は、長期履修3年コースの1回生C・Dクラスである。授業の少ない1～2月に実施している。1回生A・Bクラスはこの時期に実習に出るため実施していない。

2.1.1 ねらい

- ① 人前でのピアノ演奏や童謡指導の経験、幼児と共に活動する体験が足りない部分を、つどいやちびっこ広場での実践体験で補う。
- ② ハキハキとした声での発表、子どもに振り向いてもらえる声の出し方を知る。
- ③ 発達段階による子どもの音楽の力を知る。
- ④ コミュニケーション力を養う。
- ⑤ 2年次にある実習までのモチベーションの低下を防ぐ。

2.1.2 方法

4～6人でグループを組み、「ちびっこ広場」または「つどいの広場」のどちらか場所を選択し、内容を考え実践記録用紙に記入をする。その際、音楽だけでなく、図書館で絵本や紙芝居を探し、ペープサートを作るなど子どもの興味をひく内容に仕上げる。発表の一週間前には教員の前でリハーサルを行い、指導を受け実施の運びとなる。図1は、「つどいの広場」で音楽紙芝居を行っている様子である。



図1 音楽の基礎「つどいの広場」の様子

2.2 「子どもの保健」

対象は、1回生Aクラス（平成27年度はBクラスはなく1クラス編成）と長期履修3年コースの2回生C・Dクラスである。2回生は、1回生の後期に上記の「音楽の基礎」の授業での広場参加を経験している。

2.2.1 ねらい

- ① つどいやちびっこ広場を見学し、実際の子どもを知る。
- ② 広場にきている子どもの成長発達を観察する。
- ③ 広場での保健活動を観察する。
- ④ 保育を志すものとして、子どもや親に関心をもち、コミュニケーションを図ることが出来る。

2.2.2 方法

2回目の授業で、広場見学についてオリエンテーションを行い、4月中旬から5月上旬の約1ヵ月間に、4～5人のグループに分かれて、昼休みの30分間「つどいの広場」（第2と第4木曜日は「ちびっこ広場」）に参加し、子ども達や母親と触れあう。1回目は日時設定をしているが、2回目以降は自由参加とする。参加後、レポート（気になるシート）を提出する。

3. 学生アンケートおよびレポートの分析

3.1 方法

調査対象は、「子どもの保健」の授業を履修している1回生37名、2回生57名である。全学生の1回目の広場参加終了後、子育て広場での親子の様子や、気づいたことについてレポートを提出させた。また1か月後（6月）の授業時間内で、欠席者を除く1回生36名、2回生50名に対し、アンケート調査を行った。調査内容は、親子とのかかわりの程度や今後の課題などである。「強く思う」から「全く思わない」までの4段階とし、クロス集計にて学年ごとに比較した。

アンケート調査については、無記名で実施し、成績評価には関係ないことや調査を拒否しても不利益を受けないこと、調査結果は他の目的には使用せず破棄することを説明し、アンケートの回収をもって同意を得たものとした。

3.2 結果

レポートは、1回生は37名全員、2回生は57名中54名の提出があった。前期期間中の2回目の自由参加は1回生29名、2回生12名であった。3回以上参加したものはいなかった。アンケートの回収率は100%であった。

3.2.1 アンケート結果

「広場への参加は、自分の成長の場になったか」という質問に対し、図2のように2回生は全員「強く思う」「思う」と答えていた。1回生は36名中2名が「あまり思わない」と答えていた。親子との関わりについて尋ねたところ、図3のように、子どもとの関わりについては、1・2回生とも、殆どの者が「できている」と思っていた。特に2回生は、「強く思う」と答えたものが、50名中40名（80%）いた。親との関わりについては図4のように、1・2回生とも子どもとの関わりに比べやや低くなっていたが、2回生で80%以上、1回生では約70%の者が「できたと思う」と答えていた。 χ^2 検定の結果、子どもとの関わりについては1%水準、親との関わりについては5%水準で学年による有意な差がみられた。

次に、広場に参加して、図5に示す5つの保育実践能力に対し、必要性を感じたかという質問をした。どの項目も学年による差はなかった。「コミュニケーション能力」と「周りへの気配り」は、全員が「強く思う」「思う」と答えていた。「発達段階や遊びの知識」も、80%以上の者が「強く思う」と答えていた。「抱っこなどの養護技術」については、86名中49名(57%)が「強く思う」

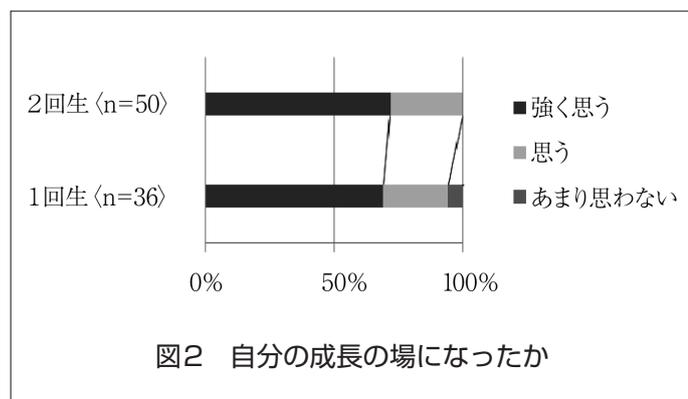


図2 自分の成長の場になったか

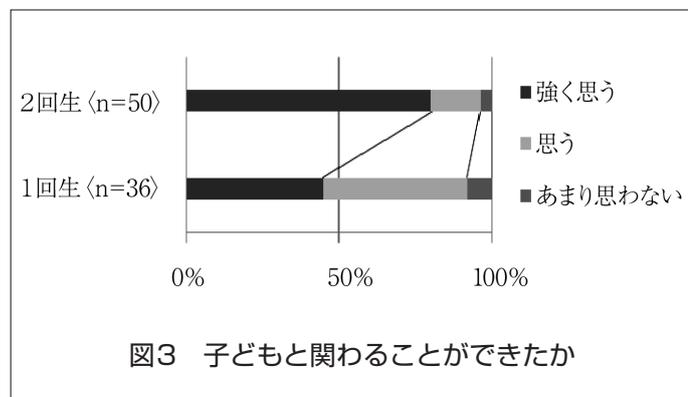


図3 子どもと関わることができたか

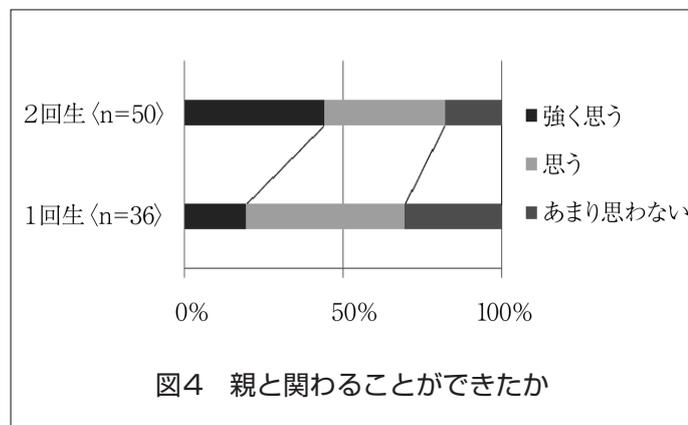
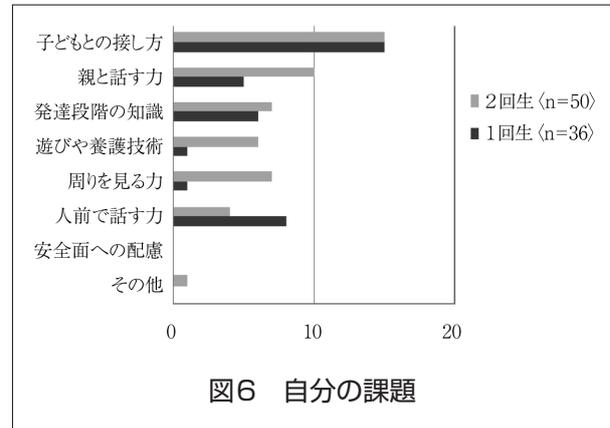
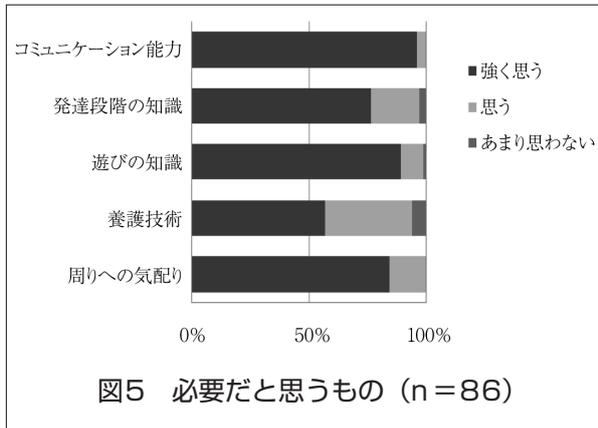


図4 親と関わることができたか

と答え、5名（6%）が「あまり思わない」と答えた。

自分の一番の課題については、図6のごとく1・2回生共に、「子どもとの接し方」と答えたものが多かった。次いで2回生は「親と話す力」で、1回生は「人前で話す力」であった。両者ともに「安全面への配慮」と答えた者は一人もいなかった。2回生はそのほかの意見も均等にみられていたが、1回生は、「遊びや養護技術」「周りを見る力」という意見は少なかった。



3.2.2 レポート自由記述

レポートの小項目は、子どもと関わって気付いたこと、親と関わって気付いたこと、スタッフや広場の様子から気付いたことなどである。子どもとの関わりでは、多くの意見が書かれていた。「同じ月齢、年齢でも、一人ひとり発達が違って」「少しの月齢の違いでも、遊び方が違って」「こちらが緊張していたら子どもは寄ってきてくれないが、子どもの気持ちになって笑顔で話しかけると応えてくれた」という学びの意見が多かった。また、「遊びがコロコロと変わり、すぐにどこかに行ったりして困った」「言葉がうまく聞き取れず、コミュニケーションに困った」という意見もあった。親との関わりでは、「自分からはあまり話せなかった」「何を話しかけて良いのかわからなかった」という意見が多く、他に「子育てについてママ友やスタッフに相談していたのを見て、色々大変なのだと思った」「同じ年齢なのに〇〇ちゃんはできるのにうちの子はできないと気にされている姿を見て、発達について悩んでいるお母さんが多いと思った」という記述もあった。スタッフや広場については、「広場は温かい雰囲気、スタッフは穏やかに話しかけていた」「一人一人に声をかけ、母親の相談事にも、その子どもにあったアドバイスをしていた」「物の取り合いなどが起こりそうでも、すぐ止めるのではなく見守りながら対応していた」「お母さんの息抜きのある場もあるのだと思った」「壁に子育てイベント情報などは貼られていたり、チラシが置いてあったり、いろいろなことが分かると思った」という意見があった。

しかし、レポート内容は個人差があり、特に1回生では、「親と関わって気付いたこと」や「スタッフや広場の様子から気付いたこと」があまり書けていない者もいた。

4. 考 察

「子どもの保健」では30分程度の広場訪室であったが、レポート上でも様々な気付きがあった。まだ数回の授業しか行っておらず、成長発達についても学んでいなかったが、「バイビーズ」¹⁾の映像教材を視聴していたために、発達段階や遊びの違いなども気付いている学生も多数いた。アンケートでも、1・2回生とも「成長の場になった」と答えていた。映像に続き、広場で実際に親子と接することにより、子どもの発達段階や子育ての現状について学ぶことができていたと考える。

親子との関わりについては、子どもとの関わりが殆どの者ができたと答えているのに対し、親との関わりは全体的に低くなっていた。「あまり関われなかった」と思っている1回生は36名中11名(30%)いた。1回生は、レポートでも「親との関わりで気付いたこと」が書けていない者もいた。それに対し2回生は、関わるのができたと「強く思っている」者の割合が1回生の倍以上の44%で、「あまり思わない」の割合が18%であった。2回生は1年次の1～2月に「音楽の基礎」の授業で、広場の親子と触れ合う体験を行っている。この時点で子どもとの触れ合いができ、次の課題である親との関わりに移れたのではないだろうか。一方1回生は、初めての広場体験で、小さな子どもと触れ合うことに慣れておらず、まず子どもと関わることに重点が置かれたのではないだろうか。

広場に参加して、必要と思われる保育実践能力を尋ねたところ、「コミュニケーション能力」と「周りへの気配り」は全員が必要だと感じていた。これは、小笠原²⁾の報告と同様の結果である。また「発達段階や遊びの知識」も必要と感じている者が殆どであったが、「養護技術」はやや低くなっていた。広場では、母親が常に一緒にいるために、抱っこやおむつ交換などをスタッフが行っている場面を見る機会もなく、必要性を感じにくかったものと思われる。それに対し「発達段階や遊びの知識」は、子どもと接する際に知識がないと保育体験ができず、スタッフのように母親からの相談にもこたえることができないと実感したのではないだろうか。

これからの課題についても、「子どもや親との接し方」や「人前で話す力」などコミュニケーションに関する項目が多く挙げられていた。学生自身も、自己のコミュニケーション能力の弱さを実感しており、課題としていることが分かる。特に1回生に多く、まずは子どもと向き合って話すことを課題としていた。また、1回生は「周りへの気配り」が必要と感じていても、課題としている者は少ない。それに対し、2回生は「周りを見る力」も含めて意見にばらつきが見られた。前述の小笠原も「回を重ねるごとに保護者対応にも慣れ、課題が自分自身の内容に移行している」と述べているように、2回生は1年次に子どもとのふれあい体験ができ、次の課題として、個々人が自分に不足しているものを見極めることができていないのではないだろうか。1・2回生とも、「安全面への配慮」を挙げている者がいなかったが、すでに広場では、スタッフが配慮しているために危険な場面に遭遇することがなく、自分の課題としては挙げられなかったものと思われる。

レポート内容も個人差があるものの、広場を実際に体験し、困ったことや出来なかったことを自覚することはできていた。また、広場の意味や、親子を迎える広場の環境作りについても考えることができていた者もいた。

しかし、1回生は約70%が2回目の自由参加を行っていたが、2回生は少なかった。2回生は、1

回生の時に「音楽の基礎」の授業で広場参加体験をしていたため、午後の授業時間外での参加は行わなかったと思われる。3回以上行った学生はなく、課題を実感しながらも、過密なカリキュラムの中、時間外でそれを克服しようとする積極性はあまり見られないこともうかがえる。

5. まとめと課題

以上の調査結果から明らかになった保育実習までのできるだけ早い時期に子育て広場に参加することによる教育的効果と課題を以下に述べる。

5.1 効果

学生は、「子どもの保健」の授業で、子どもの成長発達を学ぶ前に広場に参加している。授業を進めていく際、紙面上だけではわかりにくい発達段階も、映像視聴の後の広場参加により理解しやすかったと述べていた。近所付き合いが無くなり、年の離れた小さな子どもが身近にいない環境で育ってきている学生にとって、生きた教材となり、子どもへの認識を深めることができていた。

第2に、教科書では学ぶことができにくい子どもや親との関わり方なども、体験を通して学ぶことができる。自分ができなくとも、スタッフの親子への関わりを直接見ることも学びにつながる。同年齢以外の人とコミュニケーションをとる機会が少ない学生にとって、広場での体験は、まさしく実践的学びの場であるといえる。共感することや、言葉かけの工夫などを学ぶことができ、保育実習前の自信にもつながる。

第3に、学生は参加の回数を重ねるごとに、自己の課題に気付くことができることである。初めは、「子どもとの関わり方」「親との関わり方」が課題であったが、親子と触れ合う回数を重ねることにより保育者になる自分を見直すことができるようになる。そのため課題がより自分に不足しているものへと具体化してくる。

5.2 課題

以上のように、早期に行うことの効果はあったが、参加が継続されておらず、自主的参加が少ない。自分の課題を見出しながらも、様々な理由で1・2回の参加にとどまっている実態である。過密なカリキュラムでは、広場があいている時間帯での自主参加は難しい。「音楽の基礎」と「子どもの保健」という2つの科目それぞれの時間内でも、現在の取り組みが限界である。しかしながら、回数を重ねるごとの学びがあることは事実であり、継続的な自主参加も成績評価に反映されるような検討も必要である。また、2つの科目だけでなく、短期大学の取り組みとして他の教科目での実施も検討していく。教科目の履修だけで終わるのではなく、学生がまた参加したいと思え、活動できる環境作りも行っていきたい。

今回、「安全面への配慮」を課題として挙げているものがいなかった。すでに設営されている広場への参加であったために、自分のこととしてとらえることができなかつたのだと思われる。安全面や安心できる環境作りを考えていくことは、保育現場では必須である。この期間の広場参加で考えることは難しいが、

後期に入り授業で「事故防止」を学習した時点で、再度広場に参加し考えさせていくことも必要である。

学生教育においては、理論と実践の接続や往還が重視されるが、入学してから保育実習が行われるまでには1年ないし2年の期間がある。座学だけでは学びきれないことを、早期からの子育て広場という現場体験から実践を通して学び、それを講義で振り返っていく、そしてまた広場で実施してみるという往還に意義があると思われる。

6. おわりに

本学の広場事業は、今年10月で6年目に入る。今回は学生の学習効果から考察したが、親子の参加者も年々増え満足度も高く、大学における子育て支援活動として定着し、地域に根差した活動ができている³⁾と考えている。広場事業は、本学短期大学部の人的・環境資源を活用した地域貢献や、学生への生きた教育現場としての成果を上げつつある。今後も、この両立を深めていける取組みを考え行っていきたい。

7. 謝 辞

本取組みの趣旨に賛同していただき、多忙な現場業務の中、ご協力・ご指導いただきました広場のスタッフの方々に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) DVD トマス・バルメス(2013)ベイビーズーいのちのちからー. 紀伊国屋書店.
- 2) 小笠原真弓(2014)保育者養成校における学生教育と地域の子育て支援との繋がりについて—信愛子育て広場学生アンケート・参加者アンケート結果より—. 調査・研究報告書「地域子育て支援」の強化に向けた地域と大学の連携に関する研究:9-19.
- 3) 高橋千香子, 森本美佐, 林悠子(2015) 本学における子育て支援事業の5年間の取り組みと評価. 全国保育士養成協議会第54回研究大会示設発表

参考文献

- 1) 森下順子, 村田和子, 小笠原真弓(2014) 調査・研究報告書「地域子育て支援」の強化に向けた地域と大学の連携に関する研究. 144pp.
- 2) 佐久間路子, 瀧口優, 草野篤子, 小松歩(2012)「子育て広場特論」を通しての学生の学びと課題. 白梅学園大学・短期大学教育・福祉研究センター研究年報(No17): 47-53.
- 3) 三好年江, 逸見晶子(2011) ノンプログラム型「親子交流ひろば」における自主実習の効果と課題. 新見公立大学紀要(第32巻): 143-149.
- 4) 木村龍平, 花園誠, 大沢裕, 神戸洋子, 朝倉恵子(2012) 学生の「子育て支援活動」参画による保育実践力の教育効果の検討. 帝京科学大学紀要(Vol8): 203-212.